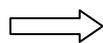
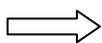


1 高等部 3 学年類型 I 保健体育	
2 メンバー	高等部教員 3 名
3 チームのテーマ 運動に対して苦手意識をもった生徒が進んで運動に取り組むための支援	
4 対象児童生徒に願う主体的な姿 対象生徒 A 少ない支援で自分で考えて行動したり進んで授業に取り組んだりする姿	
5 仮説に至るまで 運動が苦手な生徒に対して、進んで学習に参加できるようにするためにはどのような支援が必要なのか。また、少ない支援で自分から取り組めて自分でできたという達成感を味わうことができるようになるにはどのような方法があるか。	
6 研究仮説 授業の流れなど見通しをもたせて活動への不安を無くし、目標や各運動・動作のハードルを下げ、スモールステップで行うことで運動ができたという自信に繋がり、自己を肯定的に捉えて、主体的に活動に参加するのではないか。	
7 研究実践の内容 本体育グループは、高等部 3 学年の通常学級男子 15 名女子 7 名で構成されている。対象生徒 A は、運動経験が乏しくラジオ体操や縄跳びといった幼少期に養われる基本的な運動動作が身に付いていない。各競技の技術を覚えることが難しく、友だちや教師の動作を見ても自分の体の動きと合わず苛立ってしまう様子が見られる。また、複数で行う運動に対して自分の役割が理解できず周囲と動きが合わなくなり、運動への苦手意識が生まれ運動に対して進んで取り組むことが難しい。	
8 実践「組み体操」 (1) 組み体操 ・事前に各時間、行う技をカードにして順を追って説明し動きの確認を行った。	
	
(ひこうき)	(滑り台)
→	→
	
(片手バランス)	



(2) 組み体操の技を覚えるために模範動作や技の変更時に声かけを行った。

- ・技の練習をすると、次に何をするのか忘れてしまうので適宜声を掛け、次の動作に自分で移れるようにした。

(3) 組体操時の本人の写真を撮り自分の動きを視覚的に確認して良い動作を模倣できるようにした。

- ・自分の役割を伝え、位置を確認するため複数の角度から写真を撮り提示した。
- ・ポジション以外に手の位置や膝の位置を確認した。
- ・正しい動作の写真を手元に置き一つずつ技を見せながら一人で動きを行うようにした。

9 成果と課題

○組み体操の技を準追って説明することで不安が無くなり見通しがもて、落ち着いて取り組むことができるようになった。

○正しい技の姿勢や動作でなくても、自分から取った行動を称賛し、正しい姿勢や動作を確認したことで、技の型を覚えることができるようになってきた。

○正面から見た技の型だけでなく対象生徒を中心とした写真を提示して見せることで、自分の位置や次の動作が分かるようになった。

○目の前に写真を提示することで次の動作が分かり、教師に指示されることなく自分から動けたという意識につながった。

●次の動作が分かるようになったが、体勢まですべて理解することは難しかった。

●「自分から動けました」という言葉が聞かれたが、自信につながったかどうかは分からなかった。

●写真をみて動きや役割を理解することができたが、自分で考えて動くところまでは達しなかった。